

【下】震災がれき大谷石の再利用による休憩所（陽東キャンパス）。約150本の廃材を引き取って、学生が主体となって完成させた。2013年度グッドデザイン賞を受賞している（2点とも安森氏提供）



【上】宇都宮大学のUUプラザ改修では、庭園に面した場所に大谷石を用いた縁側状の廊下を新設し、風景と居場所を創造した（峰キャンパス）



地元の大学では研究対象に

宇都宮大学・地域デザイン科学部建築都市デザイン学科の安森亮雄氏（准教授）は、大谷石について「現代を生きる私たちの感性や、それを取り巻く地域、過去と未来をつなぐ時間軸の

材の出荷が順調に伸びていることを示す一つの裏付けとなるだろう。

いまや建材での出荷が主流の大谷石であるが、操業中の採石場ではチェーン式採掘機が初めて導入された昭和三十年代当時とほぼ同じ方法で採掘が行なわれている。この採掘機は石堀等の出荷を前提としたものだが、いまでもその規格に合わせて長さ三尺×幅一尺×厚み一尺（尺角石）での切り出しが基本となっている。

本来ならダイヤモンドブレードやワイヤソーを使って建材用に適した寸法で切り出すほうが効率的と思われるが、「物理的・技術的な問題があって、それらの機械はそのままでは使えない。大谷石の場合、ある程度の切り代があつて、切断面が荒れているほうが切り出しやすい」（石下理事長）ということだった。



宇都宮大学・安森准教授

中で、重要な可能性がある」として、石蔵や石堀など市内で大谷石建物の集中する地区を調査したり、新たな視点による活用などを進めている。同大学・峰キャンパスのUUプラザを改修したときは、その南側のフランス式庭園に面した場所に大谷石を用いた縁側状の廊下を新設した。

その設計意図について、安森氏は「大谷石の壁面は、庭園側から眺めると建物全体の基壇のように見える。大谷石のミノが、建物の接地面で地面と連続感をつくり、また、多孔質で温かみのある材質が、ベンチの背もたれなどの家具的な設えを可能にしている。こうした大谷石の素材の特性を活かして、雄大な庭園のスケール

採石場跡地を有効活用

すでに廃坑となった採石場については、原則として原状回復・緑化することが義務付けられているが、大谷石の採石場跡地はおよそ二百五十カ所ほどあり、それを計画的に埋め戻すことも大きな課題である。同組合では周辺住民の安全確保を第一に考えて緊急性の高い廃坑から順番に埋め戻す方針で、経費節減のため公共工事等で発生する残土の受け入れなども前向きに検討している。

もちろん採石場跡地は有効活用することも可能で、前述の大谷資料館はその成功事例だといえる。東日本大震災後、二年余り閉鎖していたが、新たなオーナーのもとで二〇一三年四月に再開した。ここは資料館だけでなく、コンサートや美術展などの文化事業のほか、映画やCM、プロモーションビデオの撮影なども行なわれており、それを目当てに遠方から訪れる観光客も増えている。週末ともなると数千人が押し寄せ、ゴールデンウィーク中は周辺で大渋滞が起きるという。

に対応した「風景」と、身体に心地よいスケールの「居場所」を同時に創出している」と説明する。

また東日本大震災で大谷石のがれきが大量発生したときは、その廃材を再利用して震災の記憶を留める休憩所として蘇らせた。約五百本の廃材を引き取り、学生が主体となって同大学の陽東キャンパス内に完成させたもので、二〇一三年度グッドデザイン賞を受賞している。

「震災では、栃木県内で約二〇万トンの災害廃棄物が発生し、その約半数が大谷石のがれきでした。一部は一般市民に無償譲渡されましたが、多くは処理業者が回収し、粉砕処理されました。実は、こうした大谷石の廃材は震災に限ったことではなく、石堀や石蔵が解体される度に恒常的に発生しています。地域の空間資源である石蔵は、有効活用されるのが望ましいが、諸般の事情で解体せざるを得ない場合は、古い良質な大谷石を再利用できるとよい」と安森氏。

今後の課題としては「組織の建物の強度を検証したうえで、補強の設計手法を確立する必要がある」とも指摘する。

BOYAN STONE
博研石材

建築石材・墓石全般

——豊富な内外材／信用と実績——



福州博研石材有限公司

TEL: +86-591-87560001 (代) 87560022 (日本語専用) FAX: +86-591-87560002
Http://www.boyan-stone.com E-mail: jp@boyan-stone.com



弊社ホームページへ
黄文健総経理へ
ぜひ、お気軽にアクセスください!!